NEWSLETTER

James Joyce Society of Japan, Spring 2022

Topics

1. 第34回研究大会のご案内
2. 第34回研究大会日程とプログラム
3. 研究発表要旨
4. シンポジウム要旨
5. 非会員による研究発表要旨
6. 新常任委員候補のお知らせ
7. 会費のお振込みについて

事務局連絡先

〒448-8542
日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢１
愛知教育大学　外国語教育講座
道木一弘研究室内

連絡先: joyceanjapan@gmail.com
協会ホームページ：
https://www.joyce-society-japan.com

Garden of Remembrance（河原真也／撮影）

1. 第34回研究大会のご案内

既にお知らせしておりますように、今年の大会は『ユリシーズ』出版百周年を記念して、2022年6月11日（土）と12日（日）の二日にわたって開催する予定です。但し、コロナ感染の状況次第では再びオンラインでの開催も考慮する必要があります。その場合はあらためてお知らせ致しますが、三年振りに対面での大会が開催できますことを心より祈っております。

プログラムとしては、初日に会員による研究発表４つ、シンポジウム１つ、記念イベントとなる二日目には、研究発表１つ、前会長の結城英雄先生による基調講演、非会員による発表２つ、最後に作家の円城塔氏を迎えて座談会を予定しております。詳しくは後掲の大会プログラムをご覧下さい。

2. 第34回研究大会日程とプログラム

日時：2022 年 6 月 11 日（土曜日）＆12 日（日曜日）
場所: 大妻女子大学千代田キャンパス

第一日目 6 月 11 日（土曜日）9:30-17:00　本館 F-435 教室

9:30-　受付
10:00-10:10　開会の辞
会長挨拶　会長　吉川　信

10:10-10:40　研究発表（1）　質疑応答　10:40-10:50
発表者：新井智也　司会：横内一雄
発表題目：イタリア語訳者ジェイムズ・ジョイス
—*The Countess Cathleen* と *Riders to the Sea* のイタリア語訳に見る翻訳感
10:50-11:20　研究発表（2）　質疑応答　11:20-11:30
発表者：小林広直　司会：横内一雄
発表題目：エゴイストは歴史を学ぶ事ができるか？
—『ユリシーズ』におけるパトリオティズム

11:30-12:00　総会
12:00-12:10　アイルランド大使挨拶
12:15-13:30　お昼休み　映画上映：Ulysses | Film

13:30-14:00　研究発表（3）　質疑応答　14:00-14:10
発表者：上條裕佳　司会：金井嘉彦
発表題目：母の願いはスティーヴンへの踏み絵
14:10-14:40　研究発表（4）　質疑応答　14:40-14:50
発表者：山田幸代　司会：金井嘉彦
発表題目：マーゲイト（Margate）はどこにあるのか？
—「海辺の少女たち（Seaside Girls）」をめぐる言説と擬態としてのモリーの語り

15:00-17:00　シンポジウム：『ユリシーズ』批評を探る
—アイルランド史とインターテクスチュアリティ
田村章（兼司会）、河原真也、平繁佳織、新名桂子

17:00-　二日目の案内：会場の教室は異なります

第二日目：6 月 12 日（日曜日）9:30–16:50　本館 E-055 教室

9:30–　受付

10:10-10:40　研究発表（5）　質疑応答　10:40-10:50

発表者：南谷奉良　司会：須川いずみ

発表題目：ジョイスと鞭打つ者

—『ユリシーズ』における残酷な打擲具、あるいは残忍な精神について

11:00-12:00　基調講演：結城英雄（前日本ジェイムズ・ジョイス協会会長）

演題：日本ジェイムズ・ジョイス協会設立と『ユリシーズ』受容

12:00-13:10　お昼休み 映画上映: Ulysses | Film

13:20-14:30　＜非会員による研究発表＞

13:20-13:40　研究発表（1）　質疑応答　13:40-13:50

発表者：福山孝子（慶応義塾大学大学院前期課程修了・ドイツ文学専攻）

司会：吉川信

発表題目：MELON と LEMON—忘却のアナグラム

14:00-14:20　研究発表（2）　質疑応答　14:20-14:30

発表者：武藤浩史（慶応義塾大学教授・英文学専攻）

司会：吉川信

発表題目：フーコー、「自己への配慮」v. 認識論、ストア主義

—*U*の語りと LB の正しさ

14:50-16:50　座談会：『ユリシーズ』は現代小説をどう変えた！？

桃尾美佳（司会）、下楠昌哉、田多良俊樹、ゲスト：円城塔（作家）

16:50　閉会の辞

新型コロナウイルス感染症への対応について

（1）大会まで一週間を切りましたが、緊急事態宣言は発出されておりませんので、対面での開催を前提に準備を進めております。ただし、今後万が一緊急事態宣言が発出された場合は中止となります。予めご了承下さい。

（2）研究発表等の資料については、誠に恐縮ですが、発表者各自で必要数のご準備をお願い致します。会場でのコピー等はできませんのでご理解の程宜しくお願い申し上げます。事前登録による参加予定者数は、一日目が50名、二日目が83名となっております。資料は事前に机上に配布致します。

（3）会場では必ずマスクを着用の上、配布資料の置かれた場所に着席頂き、席の移動は極力避けて頂きますようお願い致します。

3.研究発表要旨

イタリア語訳者ジェイムズ・ジョイス
——*The Countess Cathleen* と *Riders to the Sea* のイタリア語訳に見る翻訳観

新井智也

ジョイスはトリエステ時代、イタリア語圏にアイルランドの文学・文化・歴史を紹介する役割を担い、翻訳者としても活動した。自身の英語の生徒であった Nicolò Vidacovich による、イェイツの戯曲 *The Countess Cathleen* のイタリア語訳を手伝い、それを称賛したうえでその出版のためにイェイツに掛け合った。さらに、シングの戯曲 *Riders to the Sea* を Vidacovich とイタリア語に共訳した。本発表では、イタリア語翻訳者としてのジョイスについて論じる。

まずは、ジョイスが否定的見解を示した、Carlo Linati による *The Countess Cathleen* のイタリア語訳との対比を意識しつつ、Vidacovich によるこの劇の翻訳とそれに対するジョイスの評言から、この作家にとって優れた翻訳とはどのようなものであったかを考える。そのうえで、ジョイスが関与した二つの劇の翻訳において、どのようなイタリア語表現が用いられているかを分析する。後に Nino Frank らの協力を得て行うことになる、*Finnegans Wake* の断章のイタリア語への自己翻訳については、標準語的とする見方とトリエステ方言的という見方が提示されている。そこで、ジョイスがそれ以前に携わった英語作品のイタリア語訳において、どのような言語的特徴が見られるかを、特にアイルランド文学特有の語彙や表現がどのようなイタリア語表現に移されているかという点に着目しながら明らかにしていく。

イェイツの劇の翻訳では、豊富な語彙を用いてニュアンスの異なる言葉を訳し分けるという方策が採られている一方、シングの劇の方は、標準語の範疇に入る限られた語彙を利用しつつ、様々な構文上の工夫で原文の特徴的な表現に対応しているという特徴が見られる。このような二つの翻訳の分析を通して、ジョイスがどのような翻訳観を持っていたか、また『ユリシーズ』第 16 挿話ではイタリア語観を二人の主人公の対立軸の一つにした彼自身はこの言語をどう捉えていたか、といった問題について考えていきたい。

エゴイストは歴史を学ぶ事ができるか？
——『ユリシーズ』におけるパトリオティズム

小林広直

『ユリシーズ』第 15 挿話末尾でエピファニー的に描かれるスティーヴンとブルームの〈象徴的父子〉関係は、続く第 16 挿話において年長者のブルームが食べることや働くことなど、「常識」の意義を説くことによって強化される。酔いと疲労のせいもありほとんど話を聞いていないスティーヴンだが、文筆業と農業に携わる者の「どちらもアイルランドに属しているんだから」と述べるブルームに対し、彼は「アイルランドが大事なのは、それが僕に属しているからですよ」と言い放つ。Jean-Michel Rabaté が指摘するように、ジョイスは単なる利己主義であるところの egotism を批判し、あくまでも個人主義に根差した確たる自己を創り出すという意味で egoism の信奉者であったということは事実であるとしても、国家全体を己一人に従属させるかのようなスティーヴンの

物言いは、まさに若気の至りと言うべき実に傲岸なものだろう。この国家と個人という大きな主題を巡る対話は「私たちには国は変えられませんから、話題を変えましょう」というスティーヴンの言葉によって即座に中断されてしまうが、1907 年の「アイルランド、聖人と賢人の島」で既に「国家がエゴを持つのは、個々人の場合と全く同じである」記したジョイスにとって、第 16 挿話で明示的に描かれることのない国家と個人の関係は、おそらく読者自身が読み取るべき問題なのだろう。

ジョイスとナショナリズムの関係は従来盛んに論じられてきたが、“nationalism”という言葉をジョイス自身は『ユリシーズ』の中で一度も使っておらず、代わりに彼は“patriotism”という言葉を三度、いずれもブルームの台詞の中で使用している。1902 年の書評「あるアイルランド詩人」では、“patriotism”は「文学という芸術」においては無用であるとあり、『ユリシーズ』出版の 1922 年に至るおよそ 20 年の間に、ジョイスの愛国心に対する考えの変遷を見て取ることもできるのではないか。本発表では、20 代前半の若きジョイス／スティーヴンが未だ気づかず、30 代後半のジョイス／ブルームが「意識的な個人の生活から得られた」patriotism の問題を再検討したい。

母の願いはスティーヴンへの踏絵

上條裕佳

『若い芸術家の肖像』でスティーヴン・デダラスは、復活祭のとき聖体を拝領するようにという母の願いを拒否した。また『ユリシーズ』では、臨終間際の母の願いである祈りを拒否した。これらの拒否について友人のクランリーやマリガンから、何でもないことだから叶えてやればよかったのに、と非難される。母の願いを拒否した彼の葛藤について E. H. エリクソン(E. H. Erikson)の「アイデンティティ」の概念を通して考察を述べる。

エリクソン（1902 年－1994 年）は、アメリカ合衆国の精神分析家で、フロイトの娘アンナ・フロイトのもとで精神分析を学び、社会・文化・歴史的状況との相互作用が人間の行動や性格を規定すると主張した。そして、ライフ・サイクル理論の中で人間の生涯を 8 つの時期に区分けして、各々の時期の課題を論じた。青年期の課題が「アイデンティティの形成」で、その過程で社会から容認され易い「忠誠」という人間的強さが現れる。一方で社会から容認され難い「役割拒否」という特性も現れる。しかし、エリクソンは役割拒否の必要性も次のように述べている「アイデンティティの形成はある程度の役割拒否なしには不可能である。身近にある諸役割が、若者個人のアイデンティティの統合の可能性を脅かすところでは特にそうである」。そして、彼の著書『青年ルター』でマルティン・ルターについてアイデンティティの視点で論じている。スティーヴンにとって、冒頭で紹介した母の願いを叶えることは彼の芸術家としてのアイデンティティの形成を脅かすことを意味する。彼はカトリックの信仰を捨てて芸術家になるため、母の願いという踏絵を踏んでしまったのである。

エリクソンは、ジョージ・バーナード・ショウの自伝的記述を抜粋しながらアイデンティティの形成について述べている。発表ではショウと比較しながらスティーヴンのアイデンティティ形成についても述べる。

「マーゲイト（Margate）」はどこにあるのか？
――「海辺の少女たち（Seaside Girls）」をめぐる言説と擬態としてのモリーの語り

山田幸代

Ulysses（1922）第 18 挿話において Molly Bloom は、夫 Leopold が自宅に連れてきた Stephen Dedalus との情事を想像しながら、かつて “Margate” の海水浴場で見た “those fine young men” について考える（*U*18.1345-49）。ここで言及される「マーゲイト」という地名がどこを指すかについては、これまで研究者の間でも意見が分かれている。Don Gifford の注釈 *Ulysses Annotated*（1988）には「スペイン本土からジブラルタルを隔てる地峡の東側」にある海水浴場であると説明されており（Gifford 630）、この解釈は他書でも採用されている。いっぽう Phillip Herring は 1979 年に、「マーゲイト」と言えば一般的にイギリスの代表的なシーサイド・リゾートの一つであるというのが共通認識であり、これはモリーがジブラルタルから移動する船から見たか、過去に行ったイングランド東部の海水浴場を思い出しているのだと解釈している（Herring 515）。

本発表はこうした解釈に加えて、歌手であるモリーが言及するこの「マーゲイト」にはポピュラーソング “Seaside Girls” の歌詞にある地名が含意されているという、もう一つの可能性を提示する。19 世紀から 20 世紀初頭にかけてダブリンで流行したこのヒットソングは『ユリシーズ』の中で複数の箇所において言及されており、当時のジェンダー観を如実に示す表象となっている。また 1990 年代には Thomas Richards や Garry M. Leonard などによる文化研究を通して、この歌が『ユリシーズ』の中で果たす役割の重要性も指摘されてきた。さらにこうした先行研究とともに *Molly Blooms*（1994）において Kimberly J. Devlin が指摘する “Mimicry”（擬態）としてのモリーの語りの分析などを踏まえて、このテクストの解釈について再考してみたい。

ジョイスと鞭打つ者
――『ユリシーズ』における残酷な打擲具、あるいは残忍な精神について

南谷奉良

Ulysses（1922）の物語には、鞭打つ者（flagellant）とその打擲行為が数多く描かれる。例えば、サーカスで酷使される少女へと向けられるサディスティックな鞭打ち行為、小枝や鞭で叩くことを通じて動物を調教・制御する行為、（その名にも表れているように）James Lovebirch の *Fair Tyrant* や(後のマゾヒズム幻想の素材を多く提供している)Leopold von Sacher-Masoch の *Venus in Furs* 等のエロティカに描かれる性技としての鞭打ち、また英国海軍やコンゴ自由国での刑罰や笞刑などがある。これらの行為はそれぞれ性質を違えてはいるが、「テクストの記憶」（John S. Rikard）が再成形される第 15 挿話において、“flagellation”という集合のなかに収められる。すなわち、同挿話の幻想空間において姿形を変えて登場するさまざまな残酷な打擲具――結び目のついた革鞭、灼熱のバール、鞭打ち用の柱、樺の枝鞭、九尾の猫鞭、狩猟用の鞭、鉄釘付きの棍棒、足裏に打擲を加える杖、革紐鞭、、犬鞭、御者鞭――となって、支配と服従をめぐる関係性を規定するために振りかざされる、一つの身振りのイメジャリーを形成する。注目すべきことに、*Dubliners*（1914)と *A Portrait of the Artist as a Young Man*（1916）とは異なり、*Ulysses* に登場する鞭打ちは、痛みへの恐怖心や痛みを受けた当の人物の主観的な情動体験のリアリティを積極的に顕在化させることはなく、むしろ快楽へ転移する可能性を仄めかしながら、対象の残酷な性質や残忍な性質を輪郭づけることが多い。本発表では、そのようにして *Ulysses* が鞭打ちという行為への関心を「痛み」から「残酷さ」へとシフトさせた理由を、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて各所で生じた anti-flagellation の機運と合わせて論じ、先行する二作の小説作品とは異なる様相とフェーズ展開を考察する。

4. シンポジウム要旨

『ユリシーズ』批評を探る
——アイルランド史とインターテクスチュアリティ

田村章（兼司会）、河原真也、平繁佳織、新名桂子

近年の『ユリシーズ』研究で目立つものに、アイルランド史との関わりをテーマにしたものと、インターテクスチュアリティを取りあげたものがある。舞台となる 20 世紀初頭のアイルランドをめぐり、政治的・社会的背景や文化的背景にかんする多様な歴史的研究がなされている。また、『ユリシーズ』のテクストについて、古典文学、英文学のみならず、イタリア、フランス等、ヨーロッパの文学テクストとの関係も指摘されている。こうした研究は従来あまり注目されなかったテクストの細部に光をあて、新たな解釈を導きだしてきた。ただし、問題がなかったわけではない。細部にこだわるほど、解釈が新しいほど、研究の土台の共有が困難になり、評価しづらくなる危険もはらんでいた。初学者にとって、このことは研究の意義を見えにくくしたり、ハードルを高くする一因にもなったように思われる。

このシンポジウムでは、『ユリシーズ』におけるアイルランド史とインターテクスチュアリティにかんする研究について、専門用語や研究史など基本事項の確認も含めておきたい。その上で、各パネリストが、それぞれの関心に沿って、研究成果を発表する。この中で、これまで研究の前提として当然視されていたことが、もはやそうではないという事態を目の当たりにするかもしれない。フロアとの議論を活発にしたいと考えている。積極的なご参加をお願いしたい。ご参考に各発表の要旨末尾に基本文献を一つずつ掲げておく。

歴史とは悪夢なのか
——『ユリシーズ』をめぐるアイルランド史の再検証

河原真也

『ユリシーズ』が出版された 1922 年にアイルランド自由国が成立するが、その年の 6 月に内戦が勃発したことは見逃されがちだ。英国との関係において立場を異にする両派は、共和国成立後も Fianna Fáil（共和党）と Fine Gael（統一アイルランド党）という 2 大政党へと受け継がれ、両者が融和するに至ったのは連立政権が樹立した 2020 年のことである。英国からの自立後、実に 100 年間もアイルランド人が分断していたことは「語られない真実」と言えよう。『ユリシーズ』においても、過激なナショナリズムを信仰する「市民」はまさしく一方の極に存在するものとして、またもう一方には（カトリックに改宗した）ブルームのような平和主義的なアイルランド人の存在が描きだされている。20 世紀前半のアイルランドを考えるうえで、プロテスタント／カトリックという二項対立で英愛関係をとらえられがちだが、アイルランド史を紐解けばプロテスタントやカトリックがそれぞれ一枚岩ではなかったことがわかる。

これまで歴史について扱ったジョイス研究が多数世に出たが、本発表ではまずはその概観を辿る。そのうえで、ジョイス研究とアイルランド史との関係性がアイルランドの政情に左右されてきたことを確認したい。そして *Freeman's Journal* や *Thom's Directory*、*Annual Register* などの一次資料をもとに、1904 年前後から 1922 年

前後までのアイルランドの状況を複数の視点に基づき精査し、それらを作品中の描写と関連させながら一考察を加える。具体的に対象とするのは、1798 Rebellion や直接的言及のない Easter Rising などの歴史的事件、ミルク売りの老婆、ディージー校長、“the onelegged sailor”などの登場人物、さらには当時のアイルランドが抱えていた社会問題などとし、これらの再検証によって新たな解釈を提示してみたい。

基本文献: Potts, Willard. *Joyce and Two Irelands*. U of Texas P, 2000.

『ユリシーズ』と文芸復興運動、再考

平繁佳織

『ユリシーズ』がモダニズム文学の金字塔であることに異論を唱える者は少ないだろう。それゆえ、20 世紀になって長らく支配的であったインターナショナル・モダニズム対アイルランド文芸復興運動（あるいはナショナリズム）という構図は、ジョイスという作家をアイルランドの文脈から遠ざけてきた。ジョイスがアイルランドの作家として上書きされるのは、80 年代後半にモダニズム批評に歴史を持ち込んだ、いわゆるニュー・モダニスト・スタディーズや、*Field Day Anthology of Irish Writing* (1992, 2002)の出版に代表されるポストコロニアル批評の高まりを経てからである。イーマ・ノーランやレン・プラットらジョイス研究者によって『ユリシーズ』という作品も文芸復興運動との関係で論じられるようになったものの、ジョイス自身が運動への懐疑心を声高に表明したこともあり、文芸復興運動の主要テクストに『ユリシーズ』を含めたジョイスの作品が名を連ねることは稀である。しかし、近年の文芸復興運動に関する論考を紐解くと、ジョイスの名前や作品が全く出てこないことも、同様に稀であると気がつくだろう。そこで、本発表では近頃もてはやされているアイリッシュ・モダニズムという概念を用いて、『ユリシーズ』と文芸復興運動の関係を再検討したい。アイリッシュ・モダニズムとは、いわばナショナルとインターナショナルという相反する引力を内包する撞着的用語で、2000 年代になって急速に形を成した分野である。モダニズムにアイルランド特有の文化的・歴史的特徴を読み取るこの新たな潮流によって、文学におけるモダニズムと復興運動との距離は未だかつてないほどに近づいている。出版から 100 年が経過したいま、アイリッシュ・モダニズムを経由することで、『ユリシーズ』を文芸復興運動の文脈にどこまで引きよせることができるのか検討する。

基本文献: Platt, Len. *Joyce and the Anglo-Irish: A Study of Joyce and the Literary Revival*. Rodopi, 1998.

インターテクスチュアリティ研究の概観と「ホメリック・パラレル」の再評価

田村　章

『ユリシーズ』のテクストは典型的な「引用の織物」である。比較的シンプルな第 4 挿話を取り上げてみても、ホメロスの『オデュッセイア』、聖書に加えて、エイミー・リードの *Ruby. A Novel. Founded on the Life of a Circus Girl*、コールリッジの“Kubla Khan”、イギリスの伝承童謡、など様々なテクストとの関わりが指摘されている。『ユリシーズ』のインターテクスチュアリティ研究は、英文学だけでもチョーサーの『カンタベリー物語』からジョイスとほぼ同時代のジョージ・ムアやベケットまで及んでおり、数々のテクストを対象に研究者がしのぎを削る場となっている。オンライン版 *OED* によると、“intertextuality”はクリステヴァによる造語で 1967 年

に *Critique* 誌に初めて現れた。現在この語は、“allusion,” “echo,” “influence”等に代わって用いられることも多い。

『オデュッセイア』は『ユリシーズ』のインターテクチュアリティを論じる際に、基本となる古典である。両作品の照応関係（「ホメリック・パラレル」）について、スチュアート・ギルバートの有名な著書は、現在も読解の手引きとなっている。しかしながら、同書について数々の指摘や批判があった。リチャード・エルマンによる『ジェイズム・ジョイス伝』には、同書は「ジョイスの考えの正確な公式化ではなく、その鋭い解釈となっている」と記されている。リチャード・カインは、同書はホメロスとの照応関係を強調しすぎだと批判する。

本発表では、『ユリシーズ』のインターテクスチュアリティ研究の流れを概観するとともに、研究のあり方について、「ホメリック・パラレル」の再評価をとおして考えてみたい。

基本文献: Gilbert, Stuart. *James Joyce's "Ulysses": A Study.* Faber and Faber, 1960.

『ユリシーズ』を楽しく読むために
——ジョイス、フローベール、パロディ
新名桂子

「僕は沢山の謎とパズルを仕込んだので、何世紀もの間、大学の教授たちがその答えを探すのに忙しいことだろう。それが不滅性を確保する唯一の方法なんだ」（Richard Ellmann, *James Joyce*, 1982, p. 521)——ジョイスが『ユリシーズ』のフランス語への翻訳者ブノワ＝メシャンに言ったとされるこの言葉は『ユリシーズ』のテクスト性を見事に表現している。本発表では、ジョイスの仕掛けた「謎とパズル」の答えが分かると『ユリシーズ』がどのように深く、また楽しく読めるかを示したい。

『ユリシーズ』は、『オデュッセイア』のパロディと言われ、ジョイス自身が創作の計画表を示してそれを証明しているくらいだが、実は、『オデュッセイア』以外にも多くの原テクストがある。その中でも大変重要なものがフローベールの文学である。しかし、ジョイス文学とフローベール文学の関係性への研究者の関心は、例えば『ユリシーズ』と『オデュッセイア』の関係性への関心に比べると永らく控えめなものであった。それが、スカーレット・バロンの精緻で包括的な研究 *'Strandentwining Cable': Joyce, Flaubert, and Intertextuality* (2012)によって変わってきている。この流れの中で、まず、ジョイス文学とフローベール文学の関係性に関わるこれまでの研究を概観し、この分野の研究がその重要性にもかかわらず、やや立ち遅れてきた理由を考察する。次に、『ユリシーズ』が多くの原テクストを持つパロディ文学であり、重要な原テクストの一つが『ボヴァリー夫人』であることを説明する。最後に、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』のパロディと分かれば、どのように謎が解けて深く楽しく読めるかを論じる。

基本文献: Baron, Scarlett. *'Strandentwining Cable': Joyce, Flaubert, and Intertextuality.* Oxford UP, 2012.

5. 非会員による研究発表要旨

MELON と LEMON——忘却のアナグラム

福山　孝子（非会員）

本発表では、*Ulysses* に多くあるアナグラムの中から、melon と lemon を選び、その関係を精査してゆく。

melon は、まず、第３挿話において、スティーブンの夢の中で語られる。娼婦街で、男がスティーブンに、クリームフルーツの匂いのする melon を差し出す。男に導かれて中に入ると、赤いカーペットが広がっている。夢の中の「男」はブルームであることが、第９挿話で示唆されていた。さらに、melon は、別の個所でも言及される。第１７挿話で長い一日を終えて帰還したブルームは、“mellow yellow smellow melons”と描写される、眠るモリーのふっくらとしたお尻にキスをする。ギフォードによれば、この場面は、オデュッセウスが帰還したときに、故郷の大地にキスをする場面に対応する。この二つの例を考え合わせると、ブルームの帰還は、すでに第３挿話のスティーブンの夢の中で、予告されていたことになる。melon は、香りたつ欲望の対象であると同時に、母なる大地として描かれていた。

また、melon は、そのアナグラムである lemon にもつながる。第４挿話では、広大な melon 畑や、citron などの果樹園の開拓を募る、アゲンダット・ネタイム社による広告のことが語られる。広告を読んだブルームは、かつての友人シトロンの家でのモリーの様子を想起する。モリーは citron を手に取って、ずっしり甘くて野蛮で、「あれ」みたいな香り、という。続く第５挿話でブルームは、lemon の匂いのする石鹸を買い求め、ときどきその匂いを確認しながら、一日中持ち歩く。彼はそれを、“citronlemon”の匂いだという。つまりブルームの意識の中で、melon は、citron を経由して lemon とつながっている。

そして lemon の石鹸は、一日の旅の途上で、何度かブルームを助ける。第５挿話では、辛い現実から幻想へとブルームを導き、第１７挿話では、穢れを洗い浄める。そこで lemon は、妻の浮気や親しい者の死といった、自分ではどうにもならない出来事についての思考を一旦放棄する手だてとして使われる。以上のことの意義を、第１７挿話で詳述される“abnegation”と“equanimity”という言葉を使って、desire、abnegation、equanimity の三つを軸に考察したい。

フーコー、「自己への配慮」v. 認識論、ストア主義——*U* の語りと LB の正しさ

武藤浩史（非会員）

Ulysses（*U* と略す）第４挿話の語りの意義を、晩年の Michel Foucault の Collège de France における講義録（『主体の解釈学』、1981=82 年度）を補助線として用いながら、考察したい。主人公 Leopold Bloom（以下 LB と略す）が初めて登場するこの第４挿話の冒頭で、LB とつながる形で、“right(ing)”という語が 3 回使われ、正しき者・正す者として LB が示唆されるが、その姿が具体的にどのように描かれるかと見ると、「穏やかさ」、「落ち着き」、「平静」といったストア主義的なモチーフがキーワードになることが分かる。

晩年のフーコーは、西洋思想の両面性に触れて、思惟する主体の真理への到達の問題にこだわる認識論的側面——「哲学」と一般的に呼ばれるもの——の他に、看過されがちな「自己への配慮」という側面があることに着目し、後者の系譜を古代ギリシャ思想、古代ローマ思想、初期キリスト教思想と詳しくたどっていった。その中で詳しく分析される古代ローマのストア主義者 Epictetus と Marcus Aurelius についてのフーコーの評言を導きとし

て彼らの著作を読んでゆくと、彼らストア主義者の精神訓練の方法が上の段落で述べた *U* の語りおよび LB の自己管理の方法と似ていて、後者を「自己の配慮」の系譜の中のストア主義者の横に位置づけることが可能であるのが分かる。

そして、そのことを踏まえた上で、この晩年のフーコーの大胆な西洋思想史読み替えを参照軸として *U* を読むと、さらにどういうことが言えるのか？：１.LB は、オデュッセウス、イエス・キリストに重ねられるだけでなく、ストア主義的賢人の現代版であり、Charles Taylor が西洋近代思想の中核的特徴として挙げる“Christianized Stoicism”の一例として考えることができる。２.第３挿話 Stephen の語りの認識論的傾向と第 4 挿話 LB の語りの「自己への配慮」的傾向の対照性は、そのままフーコーが指摘する西洋思想の両面性を反映し、*U* の語りを西洋思想史の中に新たに位置づけることができる。３.さらに、LB の描写を精査すると、自己への配慮が他者への配慮と地続きであることが分かり、中世修道院の修練を「自己への配慮」の文脈で解読しようとするフーコーを修正してさらにそこに「社会性」すなわち「他への配慮」を読みこんだ Talal Asad の秀逸な議論と軌を一にする。このように、フーコーを参照することで、広い視座から *U* と LB の位置づける可能性が生まれてくる。と同時に、*U* を読むことでフーコーを修正あるいは拡張する可能性も生まれる。

6. 新常任委員候補のお知らせ

常任委員の改選を踏まえ、昨年 10 月末から 11 月 20 日まで投票、11 月 28 日名古屋鶴舞公園講堂地下カフェで開票を行いました。新しい常任委員候補は以下の 9 名の方々です。

金井嘉彦、河原真也、吉川信、下楠昌哉、須川いずみ、桃尾美佳、横内一雄、道木一弘、田多良俊樹

開票立会人：田村章、道木一弘、山田幸代、

尚、新常任委員は今年 6 月の大会総会での承認を待って、正式に決定する予定です。また、会長より新しい事務局長に、横内一雄氏が指名されました。６月大会をもって道木と交代する予定です。

7. 会費のお振込みについて

会費は協会の口座へのお振込みをお願い致します（大会会場での支払いはできません。尚、既にお振込みを済ませていらっしゃる方で、領収書が必要な方は受付でその旨をお知らせ下さい。その場で発行致します）。

振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担頂いております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、振込先が異なりますのでご注意下さい。

一般会員・・・5000 円　学生会員・・・3500 円

1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義　日本ジェイムズ・ジョイス協会

口座番号（記号）10430

番号 1854541

2.　ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義　日本ジェイムズ・ジョイス協会

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900　店番号：048

預金種目：普通

店名：〇四八店（ゼロヨンハチ店）

口座番号：0185454

千代田キャンパス　アクセスマップ

大妻女子大学
大妻女子大学短期大学部

■所属学部・短大・大学院

家政学部、文学部、社会情報学部、比較文化学部、短期大学部

人間文化研究科（大学院）［人間生活科学専攻　言語文化専攻］

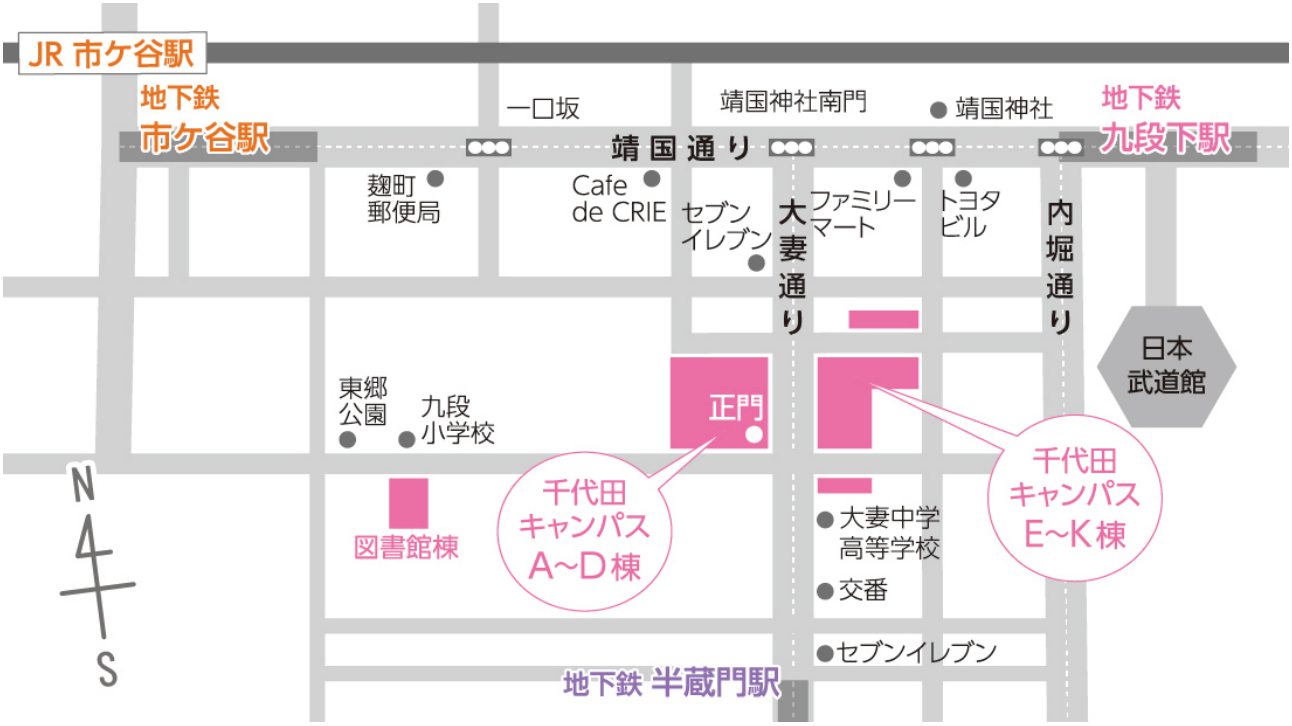
■所在地

〒102-8357 東京都千代田区三番町 12 番地

TEL：03-5275-6011

■駅からの所要時間

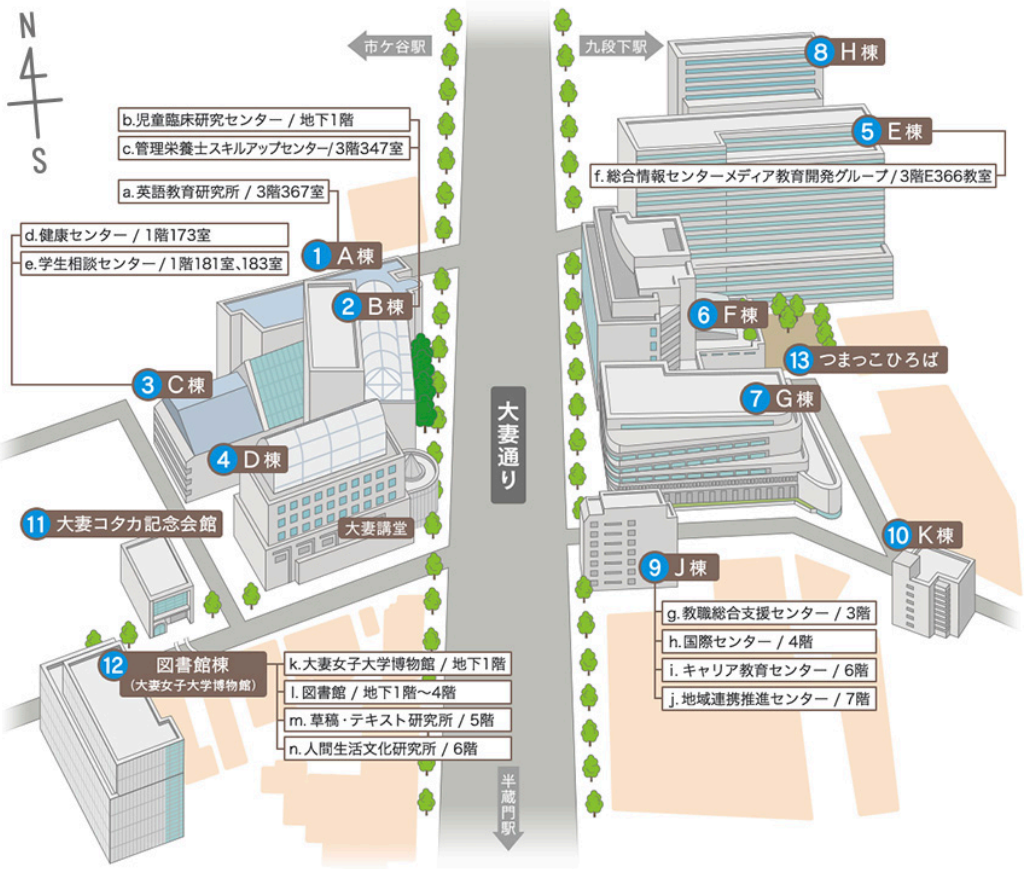
- JR 総武線「市ケ谷駅」下車 徒歩 10 分
- 都営新宿線、東京メトロ有楽町線・南北線
  「市ケ谷駅」下車（A3 出口） 徒歩 7 分
- 東京メトロ半蔵門線「半蔵門駅」下車（5 番出口） 徒歩 5 分
- 東京メトロ東西線「九段下駅」下車（2 番出口） 徒歩 12 分



＊E棟とF棟はL字型で繋がっています。F棟正面玄関（次図では大妻通りに面したE棟寄り）からお入りください（ジョイス協会）

【印刷用 PDF】

千代田キャンパスマップ



1 大学校舎A棟

a.英語教育研究所　3階367室

設備：購買部、LOUNGE RYOMA

2 大学校舎B棟

b.児童臨床研究センター　地下1階

c.管理栄養士スキルアップセンター　3階347室

設備：食物系実習室、化学分析系実験室、被服系実習室、情報処理教室

3 大学校舎C棟

d.健康センター　1階173室

e.学生相談センター　1階181室、183室

設備：学生食堂 KOTAKA KITCHEN（コタカキッチン）、アトリウム、情報処理教室

4 大学校舎D棟

設備：大妻講堂

5 本館E棟

f.総合情報センターメディア教育開発グループ　3階366室

設備：文系共同図書室、情報処理教室、エスカレーター、エスカレーターホールラウンジ

6 本館F棟

設備：学生食堂 kotacafé、食物系実習室、化学分析系実験室、被服系実習室、8階（屋上）テラス、コミュニティテラス

7 大学校舎G棟

設備：kotacafé annex、アクティブラウンジ

8 大学校舎H棟

設備：情報処理教室

9 大学校舎別館（J棟）

g.教職総合支援センター　3階

h.国際センター　4階

i.キャリア教育センター　6階

j.地域連携推進センター　7階

10 大学校舎K棟

設備：茶室

11 大妻コタカ記念会館

12 図書館棟

k.大妻女子大学博物館　地下1階

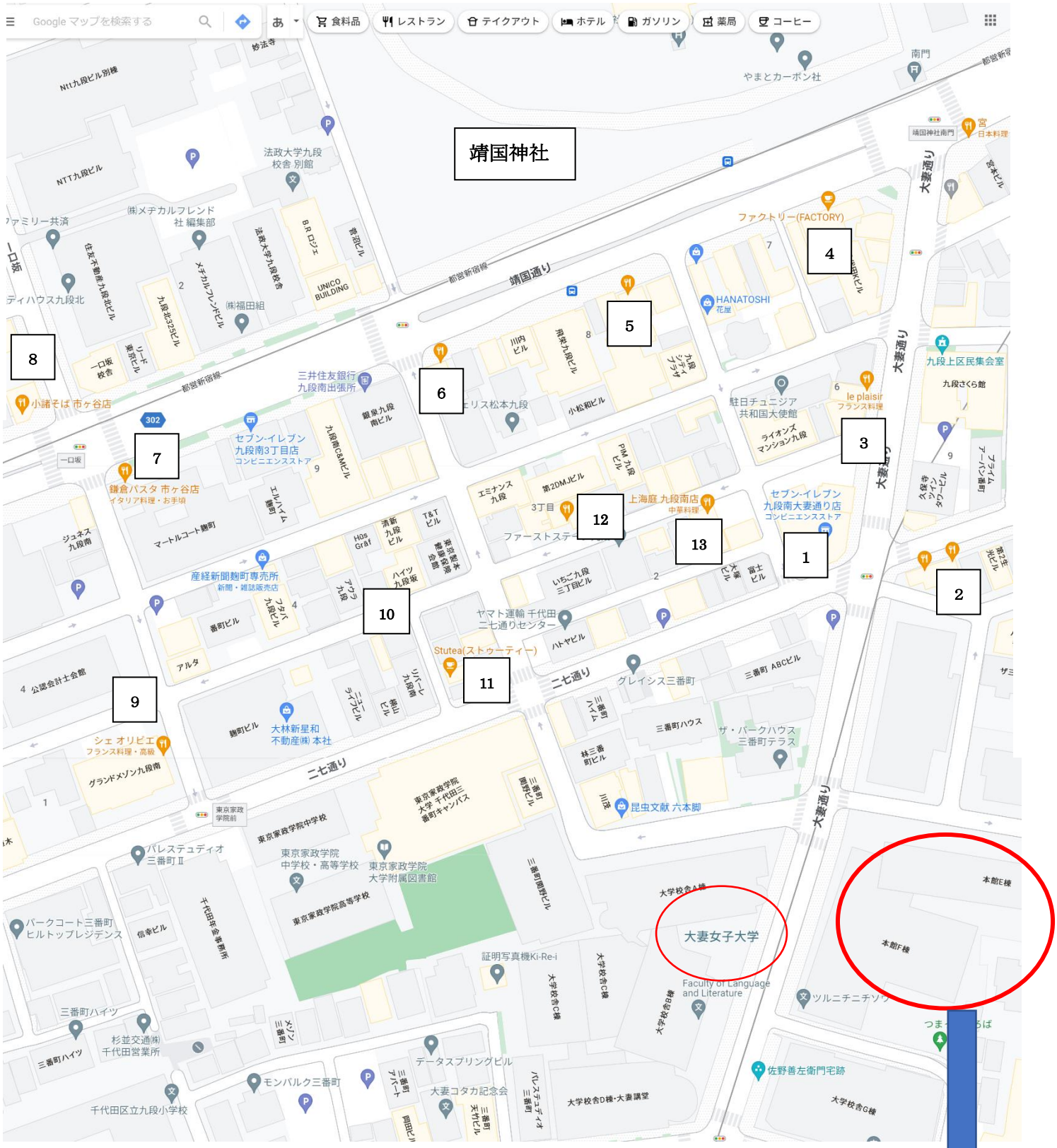
l.図書館　地下１階～４階

m.草稿・テキスト研究所　5階

n.人間生活文化研究所　6階

13 つまっこひろば

大妻女子大学周辺　グルメマップ



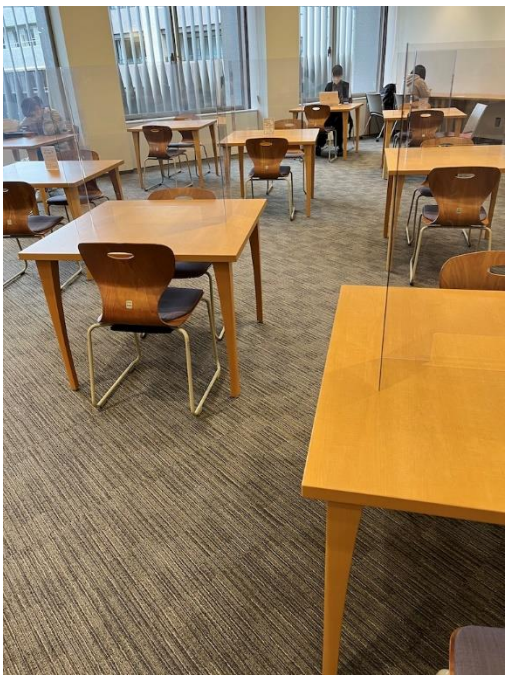
①セブンイレブン　九段南大妻通り店
②めん屋　桔梗　（ラーメン・つけ麺）
③le plasir(フランス料理) ※日曜休み
④ファクトリー／FACTORY（カフェ）
⑤天鴻餃子房　九段店　（中華）
⑥RAKLI（スペイン料理）※日曜休み
⑦鎌倉パスタ　市ヶ谷店
⑧小諸そば　市ヶ谷店　※日曜休み
⑨シェ オリビエ（フランス料理）　※日曜休み
⑩大川や（蕎麦）　※日曜休み
⑪Stutea ／ストューティー（カフェ）
⑫スワン＆ライオン（ベーカリー）　※日曜休み
⑬上海庭 九段南店　※日曜休み

大会会場
6 月 11 日（土）　F-435
6 月 12 日（日）　E-055

☆食事スペースについて

教室内外での飲食可（ただし、教室の机にはアクリル板はないため、お互いに距離を取ってのご飲食をお願いいたします）

３階から６階の各ロビーに、アクリル板つきのテーブルと椅子がありますので、こちらのご利用をお勧めします。



←４階ロビー

５階ロビー→

8 階の屋上テラス（下写真）には、20 人以上着席可能なベンチがあります（ただし、日曜日は使用不可）。